

唐宋漢語の研究に供する契丹語等文献の目録について

吉池孝一

1. はじめに

唐宋漢語の研究に供するため、契丹語の原資料とその研究論文の文献目録を作るとして、どのような観点が必要であるか、ということを考えてみた。

さて、唐宋漢語の音韻、語彙、語法を研究するうえで、契丹語資料が係わる部分は、いうまでもなく音韻である。契丹語資料には、契丹語を漢字で音写した資料と、契丹文字で漢語を書いた(必ずしも音写とはいえないものがある)資料がある。漢語を書いた契丹文字には契丹大字と契丹小字がある。大字と小字のうち、大字を音節文字とする説があるけれども、直接に唐宋の漢語の音韻を論ずるほどに、研究が進んでいるわけではない。他方、小字は表音を中心とした文字であり、この文字で音写された漢語は契丹小字文のなかに多数みられるため、小字で音写された漢語を唐宋漢語研究の音韻研究の資料として利用することができる。このように、唐宋漢語研究のために挙げる契丹語文献としては、①漢字音写の契丹語の原資料を掲載した文献およびその研究論文、②契丹小字の原資料を掲載した文献および契丹小字文中の漢語を扱った研究論文となろう。

2. 契丹語を漢字で音写した資料

契丹語を漢字で音写した資料の研究のために、契丹語そのものの研究を必要とすることは論をまたないが、そのために契丹語の研究文献を挙げることは唐宋漢語研究のための文献目録の範囲を出るであろう。唐宋漢語研究のための文献目録としては、契丹語を漢字で音写した資料の研究文献にとどめ、そこに契丹語研究の反映を期待するということにしたい。

3. 漢語音韻資料としての契丹小字

先に述べたように、契丹小字の文のなかに多量の漢語が含まれる。その漢語の質が問題となる。大部分は当時の漢語音を契丹語訛りで表記したものと見なして大過はないと考えている。しかしながら、前時代に定着した契丹漢字音と見なし得るものも含まれる。この両者を区別して研究文献目録を作ることが理想であるが、契丹漢字音の存在自体が仮説の段階である現在にあっては、両者を区別せずに年代順に配列し【音節末子音-p, -t, -kに言及】などと注記するのが穏当なところであろう。

4. その他の周辺民族の文献

契丹文字、契丹語と関わる他の周辺民族語資料として、鮮卑語資料、女真語資料を挙げることができる。これらも唐宋漢語の研究資料となる。鮮卑語資料として想定しえるもの

には漢字音写の鮮卑語資料があろう。漢字音写の鮮卑語資料以外に有用なものとしてどのような資料があるか知らない。あるいは鮮卑語中に借用された漢語を諸文字で表記した資料があるかもしれない。女真語資料の状況は、契丹語資料と同様と考える。

## 5. 唐宋漢語の研究に供する契丹語等文献目録の体裁

契丹語等文献目録の体裁として、最初に「原資料」を、次に原資料と研究の両者により構成された文献を「総合」として、最後に「研究」を配すことにすると次のようになる。もっともこれは机上の想定である。実際には、文献を収集し配置しつつ実情に合わせて修正を加えることになる。

### 1. 鮮卑語

#### 1-1. 漢字音写鮮卑語

##### 1-1-1. 原資料

##### 1-1-2. 総合

##### 1-1-3. 研究論文

#### 1-2. その他

### 2. 契丹語

#### 2-1. 漢字音写契丹語

##### 2-1-1. 原資料

##### 2-1-2. 総合

##### 2-1-3. 研究論文

#### 2-2. 契丹小字音写漢語

##### 2-2-1. 原資料

##### 2-2-2. 総合

##### 2-2-3. 研究論文【音節末子音-p, -t, -k に言及】などの注記を施す

### 3. 女真語

#### 3-1. 漢字音写女真語

##### 3-1-1. 原資料

##### 3-1-2. 総合

##### 3-1-3. 研究論文

#### 3-2. 女真文字音写漢語

##### 3-2-1. 原資料

##### 3-2-2. 総合

##### 3-2-3. 研究論文

\*本稿は平成25年-平成27年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25370488「遼金元清文字資料の研究—電子データ化を中心として—」の助成による成果の一部である。